

第二十七回 呂子明白衣もて江を渡る、関雲長敗れて麦城に走る

— 関羽の死 —

(前回から今回まで)

さて、曹操は、関羽が樊城に迫ると許都も襲われるのではないかと心配します。そこで、司馬懿は曹操に、孫権を抱き込み関羽の背後を襲わせるよう進言します。

そこで、曹操は、徐晃に樊城の救援に向かわせる一方、孫権に荊州を攻撃するよう持ちかけます。孫権はこれを受け入れ、呂蒙に荊州への侵攻を命じます。しかし、呂蒙は、関羽が呉の進攻に備えていることを知り、対策を考えても名案が思い浮かばず、病気を口実に家にとじこもります。

孫権は心配して、陸遜の様子を見に行かせます。

陸遜は呂蒙の仮病を見抜き、呂蒙に次のように献策します。それは、関羽が警戒しているのは名将呂蒙なので、呂蒙が引退すると騙して関羽を油断させ、その隙に荊州を奇襲するということです。

そこで、呂蒙は病氣療養と称して辞職し、代わってまだ無名の若き陸遜が呉の司令官にな

ります。

案あんの定じよう、関羽は陸遜をあんな小僧こぞうがと見くびり、陸遜もまた関羽に丁重ていぢゆうに接したので、関羽は完全に油断してしまい、呉への抑えの軍を樊城はんじゆう攻撃に回してしまいます。これを見た呂蒙は、すぐさま総司令官に復帰して荊州に進攻します。

(本文抄)

呂蒙は命をうけると、三万の軍勢と八十隻余りの快速船を準備し、泳ぎのうまい者を選び、白衣を着せて商人に変装させ、精銳せいゑいを大船の底にひそませるよう手はずを整えた。ついで、韓当かんとう・蔣欽しやうきん・朱然しゆぜん・潘璋はんしやう・周泰しゆうたい・徐盛じよせい・丁奉ていほうら七人の大将にあとに続くように命じ、残る部将はみな孫権について、後方から加勢にあたらせることにした。また、曹操のもとに手紙をとどけ、軍勢を進めて関羽の背後を襲うよう求め、先にこの旨むねを陸遜りくそんに知らせてから、快速船じんしやうこうを潯陽江しゆんやうかうに漕ぎ出させた。

快速船はたちまち長江の北岸に到着した。岸辺のろしだいの烽火台を守備する荊州軍(関羽軍)の兵士が呼び止めると、快速船に乗った者は「われらはみな商人ですが、江のまんなかで風に行く手はばを阻まれましたので、こちらにちよつと避難させてもらったのです」と答え、守備兵に

金品きんぴんを贈ったので、守備兵はこれを真に受け、岸边ていはくに停泊するのを許したのだった。

二更（午後九時から午後十一時の間）になると、船底に乗り込んでいた精銳がいつせいに
出撃し、烽火台を守る兵士を縛りあげてひそかに合図を送ると、他の八十隻余りの船に乗り
込んだ精銳もいつせいに飛び出し、要害に設けられた烽火台の兵を、一人残らず生け捕りに
して、船内に閉じ込めてしまった。こうして、呉の船団は速度をあげて荊州攻略に向かった
が、これに気づいた者は一人もいなかった。

荊州に近づいたころ、呂蒙は烽火台で捕らえた荊州軍の兵士を、言葉巧みに慰撫いぶし、それ
ぞれに十分な褒美ほうびを与えたいうで、偽いつわって荊州の城門を開けさせ、火を放って合図するよう
命じた。荊州軍の兵士たちが承諾しょうたくしたので、彼らに道案内をさせて荊州の城下に着くと、彼
らに「開門」と叫ばせた。

門番が荊州軍の兵士だと確かめて、城門を開けたとたん、彼らはどつと関せきの声をあげてな
だれ込み、門の内側から合図の火を放った。すかさず、呉軍が突入して荊州城を奪い取った。

(解説)

呂蒙りようもうは、歴史書の『資治通鑑』では次のように述べています。

「関羽は（曹仁が守る）樊城を討伐していますが、後方に相当多数の部隊を残しています。わたしは、いつも病氣勝ちがですので、治療の名目で建業けんぎやう（南京なんきん）に戻らせてください。関羽はその知らせを聞けば、必ず奇襲を防ぐための後方部隊を尽く引き抜いて、襄陽じやうやうに増援させるでしょう。そのとき、わが大軍は長江を逆上さかのぼり、関羽の空の本陣を襲撃すれば、南郡なんぐん（江陵）を下すことができ、関羽は捕まえることができます」

関羽の行動を予測した、呂蒙の見事な作戦です。このように智略にすぐれた呂蒙ですが、もともとは武略一辺倒ぶりやくいつぺんとうの部将でした。そんな呂蒙を育てようとしたのが孫権でした。いわゆる「呉下ごかの阿蒙あもう」の故事こじです。

○孫権の人材育成 — 「呉下の阿蒙」 — 『三国志』呂蒙伝の注に引く「江表伝かうひょうでん」より）

（孫権はつねづね呂蒙に学問に身を入れるように勧めすすめていた）

呂蒙がいった、「軍中であつてつねに職務の多忙に苦しんでおり、書物を読む閑暇いとまは得られないかと存じます。」

孫権がいった、「あなたに經典を攻究こうきゆうして博士はくしとなつてほしいなどと願ねがつたりはしない。ただ広く往事おうじを見てほしいと思うだけなのだ。あなたが職務が多忙だというが、私と比べて

どれほどのことがあろう。(中略)

呂蒙はそこではじめて学問に身を入れ、熱心に倦むことなく務めたので、彼が読んだ書物の量は、もとのからの儒者でも太刀打ちができぬほどになった。

のちに魯肅が呂蒙のもとを訪れて談論したが、しばしば言い負かされそうになった。魯肅は、呂蒙の背をトントンとたたきながら、いった。

「私はあなたが武略一点ばりだと思っていたのだが、今では、呉にいたころの阿蒙(蒙ちやん)とは見違えてしまった。」

呂蒙がいった、「士たるもの、三日会わずにおれば、まったく新しい目でもって彼を迎えねばならぬのです(士、別れて三日、刮目して相待すべし)」

それまで武略一辺倒であった呂蒙が、孫権によつて学問への目を開かれています。孫権は、ただ人材を集めるだけでなく、人材を育成しようとしているのです。こうした部下の教育に気を配る姿勢は、曹操や劉備には見られない孫権の特徴です。三国のうち呉が最も長くつづいた理由も、孫権のこのような人材育成の気風にあつたのかもしれない。

『三国志演義』は続いて、呂蒙が、占領した荊州の人心得るため、厳格な「信賞必罰」に徹する姿を描きます。

(本文抄)

呂蒙は、「みだりに人を殺したり、住民の物を取ったりした者は、必ず軍法によって処刑する」と命令を出した。

かくして、城内の官吏はもとどおりの役につけ、関羽の家族は別に移して保護し、無用の者が立ち入らないようにした。

ある日はげしい雨があつたが、呂蒙が馬に乗り、数騎を率いて四方の城門を見廻つたときのこと、住民から取り上げた竹の笠で、鎧をおおっている者を見かけたので、供の者に捕まえて問いただしたところ、その男は呂蒙の同郷の者であつた。

呂蒙は言った。

「私と同郷とはいえ、命令がすでに出ているのに、おまえは違反したのだから、軍法どおり処罰しなければならない」

「私はお上からいただいた鎧が濡れてはいけないと思ひ、笠でおおっていたのです。自分のためではありません。どうか將軍には同郷の誼をもつて情けをおかけください」と、その男は泣きながら言った。

呂蒙は「むろんおまえがお上の鎧をおおうために取ったことは、わかっている。しかし、どうあっても民間の物を取ったのを見逃すことはできないのだ」と言うと、左右の者に命じて打ち首にした。

呂蒙はさらし首にして見せしめにしたあと、その死体と首を引き取り棺におさめ、泣きながら埋葬した。これ以後、荊州の人民はその徳に感じ入り、全軍の兵士は震えあがり、綱紀は粛然とした。

(解説)

呂蒙は占領地の統治において、一見非情とも思える「信賞必罰」の姿勢をつらぬきます。中国人の「同郷の誼」は、日本人が考える以上に強いものがありますが、昔、学生時代にこの時代の歴史書『晋書』を読んでいた時、「郷里を同じくする」という言葉がよくでてきました。同郷は生まれ故郷が同じという意味ですが、「郷里を同じくする」の用例を集めてみると、「郷里」は具体的には「郡」をさすことに気がつきました。「郡」の下の「県」でもまた上の「州」でもなく、「郡」なのです。これは、後漢の官吏登用の「考廉」と、それにつづく魏晋の「九品中正法」が、「郡」での人物評価を基準にする推薦制でしたので、

そこから「郷里Ⅱ郡」のつながりが重視されていたのです。私は自分のささやかな発見に大喜びしたのを、今でもよく覚えています。ですから、当時の「同郷のつながり」は、人が世に出る機縁きえんにもなりますので、たいへん重要視されてきました。

呂蒙は、同郷の命令違反者を軍法に照らして斬首ざんしゅします。もし、「同郷の誼」で大目に見れば人心が離れてしまい、占領政策が崩れ去ってしまいます。呂蒙は違反者を厳しく処断しよたんした後、泣いて埋葬します。命令違反者を同郷としているのは、それだけ、その処断に重みをもたせたことを意味します。

『三国志』呂蒙伝には、「呂蒙は、その地の老人たちを見舞わせ、何か不足はないかと尋ねさせ、病気の者には医薬を給し、飢えや寒さに苦しむ者には衣服や食料を与えた」とあり、このようにして、呂蒙は荊州の人々の心をつかむことに成功しています。

つづいて、関羽の留守を預かっていた公安こうあんの傅士仁ふしじん、南郡なんぐんの糜芳びほうが呂蒙に降伏こうふくします。

公安こうあんと南郡なんぐん（江陵こうりょう）に駐屯していた二人は、かねがね関羽からその失策しよさくを咎められており、処罰しよばつされることを恐れて、二人は相談して呂蒙に降伏こうふくしてしまいます。

関羽は身分の低い兵卒にはやさしいが、士人には傲慢ごうまんにふるまう傾向があり、それが二人を追いつめる結果になったのです。

孫権は作戰に支障ししょうが出るので、呉の攻撃は内密ないみつにするよう曹操に申し入れますが、曹操はわざとこれを漏もらします。一つは、関羽がこの情報を信じて引き返せば樊城はんじょうの包围ほういが解けること、二つには、包围された樊城の将士の士氣しきを鼓舞こぶするためでした。

呉の攻撃を聞いた関羽は、これを曹操がわざと流した攪乱情報かくらんじょうほうだと思ひ込み、そのまま樊城への攻撃を続行します。そこへ、曹操から命令を受けた徐晃じよこうが、救援にやつてきます。関羽は、魏の徐晃と呉の呂蒙に挟撃きょうげきされる形になってしまいました。

一方、呂蒙は、関羽軍の荊州に残った家族を手厚く保護します。これを聞いた関羽軍からは、荊州の家族のもとへ逃げ帰る将兵が続出します。こうして関羽軍は次第に自滅じめつしていきます。

関羽は追いつめられて麦城ばいじょうに逃げ込み、部下の廖化りょうかに上庸じょうようの劉封りゅうほう（劉備の養子）と孟達もうたつのもとへ救援を求めにいかせません。

劉封は関羽を見殺しにすることはできないと悩みますが、孟達は、関羽の救援を拒絶きよぜつせよと劉封にいいます。劉封はこの意見に従い、廖化りょうかに救援することはできないと申し渡します。救援の望みも断たれ万策ばんさく尽きた関羽は、麦城ばいじょうから出撃しますが、息子の関平かんへいともども生け捕りにれてしまいます。

降伏こうふくを勧められた関羽は、「碧眼へきがんの小僧、紫髯しぜんのネズミ野郎め」と孫権そこんを罵り、ついに首を切られてしまいます。しかしこの後、関羽の霊は死後の世界から姿を現し、引き続き『三国志演義』の世界に登場し続けます。

(本文抄)

さて、関羽の魂はなおこの世に残り、ゆらゆらとある場所に向かつて行った。それは荊州とうよう当陽県の玉泉山なる山であった。その山には法名ほうみょうを普浄ふじょうという老僧ふじょうがいた。もともと沂水関ちんこくじの鎮国寺の長老だったが、その後、天下を遍歴へんれきしてこの地に至り、山紫水明さんしすいめいであるのを見て、ここに草庵そうあんを結び、毎日座禅を組んで修行に励み、身边しんぺんに若い行者を一人だけ置いて、喜捨きしやにたよって日々を送っていた。

その夜、月は白く輝き風がこずえの間を吹きわたたり、三更(午後十一時から午前一時の間)を過ぎて、普浄が草庵のなかで静かに座っていると、突然、空中から「私の首を返せ」と呼ぶ声こゑがするではないか。

普浄が顔をあげてじっと見つめると、空中せきとばに赤兎馬せいうまにまたがり、青龍刀せいりゅうとうをひっさげた人物ひげが見えた。左側には白面の將軍かん平、右側には黒い顔にはねあがった髯ひげの人物しゅうちう（周倉）

がお供をしている。三人そろって雲に乗って、玉泉山の頂上にさしかかった。普浄は関羽だと見分けると、手に持っていた牒子ほつすで戸たを叩きながら言った。

「雲長どの、どこにおられるのか」

関羽の霊ははつと悟りさと、馬から下り風に乗って草庵の前に舞い降りると、両手を胸の前で組み合わせながらたずねた。

「ご坊はどなたですか。法名をお聞かせ願いたい」

「老僧は普浄と申します。昔、沂水関の鎮国寺で君侯とお会いしたことがあります。お忘れですか」と普浄。

「おお、あの時はお助けいただき、肝きまに銘じて忘れるはずがありません。今、私は禍わざわいにあい命を落としました。どうか教えを賜りたまわ、迷いを晴らしていただきたく存じます」と関羽。

「前世ぜんせいの是非ぜいひ（良いこと悪いこと）は、あれこれ論じるにはおよびません。ただ、因果いんが（原因と結果）はめぐり、いささかの食い違いもないのです。將軍は呂蒙に殺され、『首を返せ』と叫んでおられますが、ならば、顔良かおりょう・文醜ぶんしゆうおよび五関ごかんの六将ら（いずれも関羽に殺された者たち）は、誰に首を返してくれと言えばよいのですか」と普浄。

すると、関羽ははつとして悟りさと、成仏じようぶつして消え去ったが、その後も、しばしば玉泉山で靈験れいげん

を現し住民を助けたので、土地の者は関羽の徳に感謝して、山頂びように廟こんりゆうを建立し、四時しじ（春夏秋冬）の祭祀さいしをたやさなかつた。

（解説）

関羽は、当陽とうようの玉泉山ぎよくせんざんの普淨ふじようの前に出現します。普淨は、「過五関斬六将かごかんざんりくしやう」の名場面なまげめんで関羽の危機を救った人物ですが、その後は托鉢たくはつしながら旅に出て、この時、玉泉山ぎよくせんざんに草庵そうあんを結んでいました。関羽の霊は普淨の言葉を聞いて悟りさとを開き（原文…於是關公恍然大悟、「是において、関公、恍然こうぜんとして大悟す」）、その後も玉泉山で靈異れいゐを現して住民を守ったとされています。こうして、ここで成仏したはずの関羽ですが、しかし仇敵きゆうてきに対しては恐るべき怨靈おんりゆうとして襲おそいかかります。

（本文抄）

さて、孫権は関羽を討ち取つて、荊襄けいじやうの地をすべて手中に収めたので、全軍の将兵しやうへいに褒美ほうびを与えてねぎらい、また諸将を一堂に集めて慶賀けいがの大宴会を開いた。

その席上、孫権は呂蒙を上座に座らせ、諸将を顧かえりみて言った。

「私は久しく荊州けいしゅうを手に入れることができなかつたが、今、このように簡単に手に入れることができたのは、すべて子明しめい（呂蒙の字あざな）の功績だ」

そこで、手ずから呂蒙に酒を酌くんで与えた。呂蒙は盃を受け、それを飲もうとした時、ふいに盃を地面に投げつけ、片手でぐいと孫権の胸むなぐらをつかみ、声を荒げて罵ののした。

「碧眼へきがんの小僧、紫髯しぜんのネズミ野郎。私が誰だかわかるか」

諸将がびつくり仰天し急いで孫権を助けようとしたとき、呂蒙は孫権を押し倒して、つかつかと前へ進み、孫権の座席に座ると、両方の眉まゆを逆立さかたて両眼をむいて、大声で怒鳴りつけた。

「私は黄巾こうきんを破つてより以来、天下を駆けまわること三十余年、今、おまえの奸計かんけいにはまつて命を落とすことになつた。生きておまえの肉を食らうことはできないが、死んで呂蒙の魂たましいを追いかけてやる。われこそは漢寿亭侯かんじゅていこう関雲長である」

孫権は仰天し、慌あわてて将兵をひきいてひれ伏したところ、見れば、呂蒙は地面に倒れ、体じゅうから血を流して息絶いきたえていた。諸将はみなこれを見て、震えおののいたのだつた。

関羽の霊がまず憑りついたのは、彼を追いつめた呂蒙でした。関羽の霊が呂蒙に憑りつき、呂蒙は孫権を罵りながら死んでしまいます。体じゅうから血を流して息絶えるという、凄絶な姿で死んでいきます。いったんは普浄に諭されて大悟したものの、ここでは、おどろおどろしい執念にとりつかれた関羽の姿を描きます。

『三国志』呂蒙伝には、呂蒙は荊州平定後しばらくして発病し、孫権の手厚い看護をうけながら死去し、孫権の哀痛は深く悲しみにくれたとあるだけで、関羽の怨霊の記述はありません。関羽と呂蒙の亡くなった時期が接近していたので、『三国志演義』は呂蒙の死因を関羽の祟りということにしています。

太田出氏は「関羽と霊異伝説」（名古屋大学出版会）で、『三国志演義』の古い刊本である嘉靖本が成立した明代は関羽信仰の発展期、また毛宗崗本が成立した清代は、多くの関羽の霊異伝説が生み出された時代とされています。とくに清朝は征服王朝という事情から、関羽の霊異話を政治的に利用したとされています。『三国志演義』の関羽の怨霊譚には、そうした時代背景があります。

『三国志演義』での関羽の霊には、玉泉山のようにその霊力で人々を庇護する面と、呂蒙のように怨みある人に祟るといふ二つの面があります。

このような霊力の話は中国に限りません。日本では菅原道真の怨霊伝説は有名ですし、紫式部の「源氏物語」は六条の御息所の生霊まで登場させています。人間は、心の奥深いところにある得体のしれないものへの畏怖を、「霊」という形で表現したのだと思います。眼前で呂蒙の凄惨な死をみた孫権は、あの世からの関羽とこの世での劉備の報復を恐れ、曹操の差し金で関羽が死んだのだと思わせるため、関羽の首を曹操に送りつけます。

(本文抄)

孫権は、関羽の首を木箱に入れ、曹操に届けさせた。このとき、曹操は軍勢を返して洛陽に帰還していたが、呉から関羽の首がとどいたと聞くと、喜んで言った。

「雲長が死んだからには、わしも枕を高くして眠れるだろう」

曹操が箱を開いて見たところ、関羽の顔は生きていたようだった。曹操は思わず笑って語りかけた。

「雲長どの、その後、お変わりはないか」

その言葉が終わらないうちに、関羽の口が開き目が開き、髪も髯もすべて逆立ったので、曹操はあっと驚いて気絶した。配下の者が急いで助けおこすと、曹操はしばらくしてようやく

く気がつき、一同を見ながら言った。

「関將軍はまことの天神だ」

また、呉の使者も関羽の霊が現れて呂蒙に憑りつき、孫権を罵りながら呂蒙が死んだことを告げると、曹操はますます恐怖におののいた。かくして、牲を捧げて祭祀をおこない、香木を刻んで体を作り、王侯の礼をもつて洛陽の南門の外に葬った。

(解説)

曹操は関羽の首がまるで生きているようであったので、「雲長どの、その後、お変わりはなにか」と、思わずかつて華容道で呼びかけたのと同じ言葉で呼びかけます。

するとこの時、関羽の霊が出現し、さすがの曹操も恐れおののきます。そしてこの後も、曹操は関羽の霊につきまとわれ、しだいに命をすり減らしていきます。

では、関羽が怨霊として描かれるのはなぜでしょうか。『三国志演義』では多くの英雄が非業の死をとげていますが、なぜ関羽だけが怨霊と化して登場するのでしょうか。

それは、『三国志演義』における関羽の存在の大きさから、「なんとかして彼を物語世界にとどめておきたいという、作者および読者の願望による操作にほかならない(井波律子)「中

国の五大小説（上）「岩波新書」という一面があります。しかし、それだけではないように思えます。

関羽が怨霊となるのは、関羽の人物像に要因があるのだと思います。

関羽は「万人の敵」と称される「勇」、また、曹操の恩義に報う「信義」を持ち、まさに陳寿が評したように「国士」としての風格がありました。しかし、一方で「剛情で自信過剰」という性格的欠点も合わせもち、結局そのために身の破滅を招いた、と陳寿はその冷徹な人物観をもって評します。

「剛情で自信過剰」は、「執着心の深さ」につながるように思えます。この「執着心」こそ、死後「怨霊」として仇のある人に憑りつく必要条件です。関羽の人物像は、この条件にぴったりだったのです。

『三国志演義』は、関羽信仰が広まり、その靈異が喧伝されるようになった明・清の時代に成立しますので、引き続き関羽を怨霊として登場させる条件が揃っていたといえます。

次に関羽は、劉備の夢の中に現われ、私の恨みを晴らしてくれと告げます。

（本文抄）

ある日、劉備は全身が震えるような感じにおそわれ、夜になっても寝つくことができないので、起きて明かりを灯し読書をしていると、そのうちうとうととして来たので、机に突っ伏して寝てしまった。

すると、室内に冷たい風が入って来て灯火がゆらゆらし、暗くなったかと思うとまた明るくなった。頭をもたげて見ると、誰かが灯火の下に立っているではないか。

劉備が「何者だ。夜更けに私の部屋に入って来るとは」と聞いても、何も答えない。劉備は怪訝に思い、立ち上がって目を凝らすと、なんと、関羽が灯火の陰に隠れようとしている。劉備が「弟よ、その後、変わりはないか。夜更けにここに来たのは、きつとただ事でないことがおこつたのだろう。私とおまえは血を分けた兄弟同然なのに、どうして隠れるのか」と聞くと、関羽は泣きながら言った。

「兄上、どうか私の恨みを晴らしてください」

言いおわると、にわかに冷たい風が吹き、関羽の姿は消えた。はっとして気がつくくと、それは夢の中のことだった。

「情」の人 ― 劉備

劉備は夢の知らせに居ても立っても居られません。そこに、関羽が殺害されたという知らせが入ります。劉備はそれを聞くや、すぐに呉討伐に向かおうとします。

諸葛亮は、呉は我らに魏を討たせ、魏もまた我らに呉を討たせるのが狙いです、それについてはいけませんと再三にわたって劉備を諫めます。

三国志が人々の心に迫るのは、劉備と関羽・張飛が「桃園の誓い」のままに、人間として貫いた「心の美しさ」にあるからだと思います。

趙翼は、劉備集団の特徴を「性情を以て相い契り」と表現します。中心者の劉備はどこまでも「情」の人でした。終生の盟友関羽を殺された劉備は、すぐさま呉に向けて出兵しようとしています。それは生死を誓った義兄弟、関羽を殺されたことに対する、ストレートな心情の噴出でした。

そこに、劉備集団に参画した諸葛亮や関羽、張飛、趙雲が、終生、劉備への変わらぬ信頼を持ち続けた最大の要因があったのでしよう。